巻頭言

電子書籍

神戸赤十字病院 院長　田原　真也

ひと昔前、30年ほどになるだろうか、パソコンで電子メールが使用されるようになり、便利だという評判が口コミで広がりはじめたかと思うと、あっという間に通信手段の主役にのし上がり、今や、手紙やハガキをはるかに凌ぐ存在となった。さらにスマートフォンの普及で、パソコンの前に座らなくても、あらゆる場所で、世界中のどことでも、通信のやりとりが可能になっている。もはや通信の世界で、紙媒体は過去の遺物になろうかという勢いである。

通信の世界に比べれば、本の世界はまだアナログの書籍が大きな存在を占めているように思う。しかし知り合いの若手医師の中には所有する医学書を全て電子化して、タブレット1台あれば、ベッドサイドでも閲覧が可能だし、引っ越しも楽々だと割り切っている者もいる。そういう私自身も英和辞書や、国語辞典を開くことは、ほぼなくなり、スマートフォンの辞書アプリを引くか、インターネットの“何とかペディア”で調べることが専らである。学会機関誌も電子ジャーナル化したものが増えている。病院では電子カルテが当たり前の存在にまで普及した。古い紙カルテを倉庫を借りてまで保存するなんてことは近い将来なくなるだろう。やはりいずれ本の世界でも、紙媒体は旧世代の化石となるのであろうか？　70歳、団塊の世代の一員である私は、アナログからデジタルへの急速な移行期を身をもって体験してきた。最近、大手通販会社の会員になることで、電子書籍が無料で読み放題という宣伝にのせられて利用してみた。結果として、私の感想では、雑誌や旅行ガイドなどはかなり読みにくく、アナログ本に軍配を上げたい。同様の経験は新聞である。朝食の傍、目を通す新聞を、スマホアプリの新聞で代用する気にはなれない。ただしこれは電子書籍の様式の問題であるように思う。使い勝手が改善されれば、やがて電子書籍に軍配が上がるようになるのだろう。いやむしろ若い世代はすでに電子書籍に移行しているのかもしれない。

世の中の変化の方向としては間違いなく電子化に進むのだろうが、どこかアナログ世界へのノスタルジーのようなものが私の頭の中から拭い去れない。自宅の書斎も、職場の自室も戸棚には滅多に開けない本がぎっしり詰まっている。使用しないのだから断捨離を敢行すればいいようなものであるが、どうしてもそれはできない。「解剖学はこの教科書で勉強したな」「生化学はこの本を読んでも苦手だったな。再々追試を受けたな」といった思い出がアナログの本には宿っており、こどもの頃、図書室に入ったときの紙とインクとカビの混じった匂いであろうか、独特の雰囲気、匂いとともに若き日の記憶と強く結びついている。

ここまで思いを巡らせてくると「本は紙とインクでなければならない」という根拠はどこにもなく、全て電子書籍で代用できるという結論になりそうである。ただ、人の心の中にある本に関する過去の記憶や想い出に対する追慕の念だけが、歴史の必然である電子化への流れに、必死であらがっているのではなかろうか。

たはら　しんや

少なくとも私が人生を終える、そう遠くない日までに、完全電子化を迎える日はなさそうだと、どこか安心している自分に気づく。

平成30年1月